



力

chikara

学校・地域・行政が支え合う 「地域に根ざした学校づくり」

はじめに

東京都北区では、地域で子どもたちとともに育てる仕組みづくりを試行しています。それぞれの学校での取組がありますが、本稿では、その一つとして北区立なでしこ小学校の事例を紹介

します。なでしこ小学校は、平成一四年の統合後に始まった、新たな学校づくりの中で「地域が支える学校・地域と協働する学校」の在り方を模索してきました。それを具体化する方法として始まったのが、スクールボランティアと地域ボランティアコーディネーターの試みです。

スクールボランティア制度の 始まりと スクールコーディネーターの 誕生

「子どもたちの豊かなコミュニケーション能力の向上のために地域の方々

にかかわってほしい」という学校の思いで平成一七年度に発足したスクールボランティアは登録者数八〇名に及びました。それまで必要な時だけ保護者などに協力の募集をしていたものを、年度の始めに「ボランティア登録」の募集を行い、何かあるごとに依頼をするという方法です。

地域の人にも呼びかけたことにより、ボランティア登録者は、図書・読書活動への参画、緑化等学校環境整備への支援はもとより、学習活動の支援などにも年数回の活動ができるようになりました。そこで見えてきたのが「コーディネーターの必要性」です。

有意義な学校ボランティアでした。が、教員が授業を行いながらボランティアへの依頼や人数調整、連絡などをするのは時間的にも困難で、登録をしてもなかなか実際に活用できないという状況でした。そういった中、調整役やボランティアと学校のパイプ役として地域の人にかかわってほ

しいという声があがり、平成一八年度に向けて、「地域ボランティアコーディネーター」を加えた組織図にしました。

翌年度に入ると北区教育委員会により「スクールコーディネーター」の制度化が始まったことがさらに後押しとなりました。かえりみると、スクールボランティアが発足する以前に、平成一〇年に発足したおやじの会、平成一二年から始まったPTAによる「こども一〇番」事業、『地域寺子屋』など、現在の基盤となる活動が取り組まれたことも大切な礎となっています。

なでしこボランティアの 目的と現在の活動内容

北区立なでしこ小学校でのボランティア活動の目的は、学校の教育活動全般に、「なでしこスクールボランティア」を生かすことで、地域の方々と子どもたちの交流、地域の皆様同士の交流を進めることです。

また、こうした交流をおして、子どもたちのコミュニケーションの育成とともに、大人たちが学校のあり方に向けた意見を出せる機会をつくり、学校運営の改善・充実に役立てようというものでした。具体的な活動内容としては、次のようなものがあります。

図書ボランティア

図書室の整理、本の補修、壁やコーナーなどへの装飾などを定期的集まって活動する他、二〇分休みに行う読み聞かせ活動、読書週間でのエブロンシアターなど、子どもたちの読書に対する意欲を高める活動をしています。

緑化ボランティア

屋上緑化のメンテナンスへの協力、学級菜園の充実、校内の植物の植え替えなど、校内のあらゆる「緑の環境」へのサポートのみならず、総合的な学習の時間や理科授業のサポート、ゲストティーチャーとしても活躍いただい

ています。

安全ボランティア

各町会・自治会の中で話し合い、それぞれの区域で子どもたちの下校時間に合わせた安全・安心のための見守りを行っています。

授業支援ボランティア

授業支援については、特に、各学年



学級菜園の手入れも行います



図書ボランティアにおける読み聞かせ

でボランティア導入についての年間予定を立ててカリキュラムを作っています。具体的には以下のような内容があります。

・校外活動時の引率

教室の外の授業には欠かせない引率ですが、単に見守りだけでなく子どもたちがより充実した体験をできるようにアドバイスをすることもあります。あくまでも、「活動の目的を踏まえて

手や口を出しすぎず」を念頭に教員のサポートに回ります。

・少人数グループ活動時のサポート

校内研究テーマでもある「豊かなコミュニケーション能力の育成を目指して」行われるさまざまな授業で少人数活動をする子どもたちの中に入り、コミュニケーションの相手として活動します。

・ゲストティーチャーとしてのかかわり

地域に長く住む高齢の方をお招きして、地域の伝統や歴史、昔の話などをしていただいたり、陶芸・食育・音楽など専門的な知識を持つ地域住民の方々に授業をサポートしていただくなど、それぞれの経験や技術を活かして授業に参画いただくこともあります。

活動の手ごたえと課題に向かつて

地域の色々な方と接することで豊かなコミュニケーションが育つこと、普段と違った刺激が子どもたちの興味・関心を触発することが成果として挙げられます。

色々な地域の人から褒められたり、時に注意されたりしながら、「親以外の大人が自分を見てくれている」ことが自分の存在を感じられることにつながり、それらが子どもたちの意欲の支

えになつていいると思えます。

教員とコーディネーターの役割分担については、まだまだ不鮮明な状態です。それぞれの違いを活かしながらも連携して効果が上がるあり方を構築することが一つの課題です。

また、それぞれの活動のジャンルでの組織化を進めることも大事な課題です。例えば、環境整備面など直接教育活動にかかわらない活動は、学校と相談しながらも主体的に動くことが意識の高揚や参加しやすい活動形態につながり、人材の育成・拡大につながります。

この課題を達成するために必要なのが、ボランティア間の交流や勉強の場の提供です。登録したすべての人に実際に活動していただくことは、なかなか難しいですが、交流会を開催して、活動報告や年間予定などの情報を伝えるなど、やる気に応じた場の提供によってその気持ちを保つことも必要と考えています。

これまでの「できる人ができることを無理なく少しずつ」に加え、これからは「やる気に応じて」かわるボランティア活動へと幅や深さを増す活動を展開していけるよう取り組んでいきたいと考えています。

(なでしこ地域ボランティア

コーディネーター 大川文子)